

浮世絵の鑑賞

永井荷風

青空文庫

我^{わがくに}邦現代における西洋文明模倣の状況を窺^{うかが}ひ見るに、都市の改築を始めとして家屋^{じゆうき}什器庭園衣服に到るまで時代の趣味一般の趨勢^{ちようすう}に徴^{うた}して、^{うた}転た余をして日本文華の末路を悲しましむるものあり。

余かつて^{ふつこく}仏国より^{かえりきた}帰来りし頃、たまたま^{しばれいびよう}芝靈廟の門前に立てる明治政庁初期の官吏某^{ぼう}の銅像の制作を見るや、その制作者は何が故に新旧両様の美術に對してその効果上相互の不利益たるべきかかる地点を選択せしや、全くその意を了解するに苦し

みたる事あり。余はまたこの数年来市区改正と称する土木工事が
何ら愛惜あいせきの念もなく見附みつけと呼馴よびなれし旧都こじよの古城門こじょうもんを取払とひな
ほ勢いきおいに乗じてその周圍に繁茂はんばつせる古松を濫伐らんぱつするを見、日本人
の歴史に対する精神の有無うむを疑はざるを得ざりき。泰西たいせいの都市
にありては一樹の古木いちうの堂舎といへども、なほ民族過去の光
榮を表現すべき貴重なる宝物ほうもつとして尊敬せらるるは、既に幾多
漫遊者けんちの見知する処ならずや。然しかるにわが国において歴史の尊重
は唯ただ保守頑冥がんめいの徒が功利的口実の便宜となるのみにして、一
般の国民に対してはかへつて学芸の進歩と知識の開発に多大の妨
害をなすに過ぎず。これらは実に僅少なる一、二の例証のみ。余
は甚いしく憤いきどおりきまた悲しき。然れども幸ひにしてこの悲憤と絶

望とはやがて余をして日本人古来の遺伝性たる諦めの無差別観に入らしむる階梯かいていとなりぬ。見ずや、上野の老杉ろうさんは黙々として語らず訴へず、独りおのれの命数を知り従しよ容ようとして枯死こしし行けり。無情の草木遥はるかに有情ゆうじようの人に優まさるところなからずや。

余は初めて現代の我が社会は現代人のものにして余らの決してくちばい嘴を容るべきものにあらざる事を知りぬ。ここにおいて、古蹟の破棄も時代の醜化もまた再び何らの憤慨を催さしめず。そはかへつてこの上もなき諷刺的滑稽の材料を提供するが故に、一変して最も詭弁きべん的てきなる興味を中心となりぬ。然れども茶番は要するに茶番たるに過ぎず。いかに洒脱しゃだつなる幫間ほうかんといへども徹頭徹尾せんすに頭かしらを叩いてのみ日を送り得べきものに非あらず。余は日々にちにち時

代の茶番に打興うちきようずる事を勉むると共に、また時としては心ひそかに整頓せる過去の生活を空想せざるを得ざりき。過去を夢見んには残されたる過去の文学美術の力によらざるべからず。これ余が広重ひろしげと北斎ほくさいとの江戸名所絵によりて都会とその近郊の風景を見ん事を冀こいねがひ、鳥居奥村派とりいおくむらはの制作によりて衣服の模様器具の意匠いしょうを尋ね、天明てんめい以後の美人画によりては、専制時代の疲弊へいたらく墮落せる平民の生活を窺うかがひ、身につまさるる悲哀の美感を求めし所以ゆえんとす。

浮世絵は余をして実に渾然こんぜんたる夢想の世界に遊ばしむ。浮世絵は外人の賞するが如くただ啻に美術としての価値のみに留とどまらず、余に対しては実に宗教の如き精神的慰藉いしやを感じしむるなり。特殊なるこの美術は圧迫せられたる江戸平民の手によりて発生し絶えず政府の迫害を蒙こうむりつつしかも能よくその発達を遂げたりき。当時政府の保護を得たる狩野家かのけ即ち日本十八世紀のアカデミイ画派の作品は決してこの時代の美術的光栄を後世に伝ふるものとはならずりき。しかしてそは全く遠島えんとうに流され手錠てじょうの刑を受けたる卑しむべき町絵師の功績たらずや。浮世絵は隠然として政府の迫害に屈服せざりし平民の意気を示しその凱歌がいかを奏するものならずや。官營芸術の虚妄なるに対抗し、真正しんせい自由なる芸術の勝利を

立証したるものならずや。宮武外骨氏の『筆禍史』は委さにその事跡を考証叙述して余すなし。余また茲に多くいふの要あるを見ず。

三

浮世絵はその木板摺の紙質と顔料との結果によりて得たる特殊の色調と、その極めて狭少なる規模とによりて、寔に顕著なる特徴を有する美術たり。浮世絵は概して奉書または西之内に印刷せられ、その色彩は皆褪めたる如く淡くして光沢なし、試みにこれを活気ある油画の色と比較せば、一ツは赫々たる

烈日の光を望むが如く、一ツは暗澹たる行燈あんどうの火影ほかげを見るの思ひあり。油画の色には強き意味あり主張ありて能く制作者の精神を示せり。これに反して、もし木板摺の眠気ねむげなる色彩中に制作者の精神ありとせば、それは全く専制時代の萎微いびしたる人心じんしんの反映のみ。余はかかる暗黒時代の恐怖と悲哀と疲労とを暗示せらるる点において、あたかも娼婦すずが啜すすり泣きする忍びしの音を聞く如き、この裏うらがな悲しく頼りなき色調を忘るる事能あたはざるなり。余は現代の社会に接触して、常に強者の横暴を極むる事を見て義憤する時、ひるがえ翻つてこの頼りなき色彩の美を思ひその中うちに潜ひそめる哀訴の旋律メロディによりて、暗黒なる過去を再現せしむれば、忽ち東洋固有の専制的精神の何たるかを知ると共に、深く正義をうんぬん云々するの愚なる

ことを悟さとらずんばあらず。希臘ギリシヤの美術はアポロンを神となしたる国土に発生し、浮世絵は虫けら同然なる町ちやうにん人の手によりて、日あ当り悪しき横よこちやう町の借家しやくやに制作せられぬ。今や時代は全く変革せられたりと称すれども、要するにそは外觀のみ。一度ひとたび合あ理まなこの眼を以てその外皮がいひを看破かんぱせば武断政治の精神は毫も百年以前ごうと異なることなし。江戸木板画の悲しき色彩が、全く時間の懸隔けんかくなく深くわが胸きやうてい底ぞこに浸しみ入りて常に親密なる囁ささやきを伝ふる所ゆえんえんに以えんけだし偶然にあらざるべし。余は何が故か近来主張を有する強さなかき西洋の芸術に対しては、宛ら山嶽を望むが如く唯茫然ぼうぜんとしてこれこれを仰あぎ見るの傾かたきあるに反し、一度ひとたびその眼めを転じて、個性に乏しく単調にして疲労せる江戸の文学美術に対すれば、忽ち精

神的並に肉体的に麻痺の慰安を感じざるを得ず。されば余の浮世絵に關する鑑賞といひ研究といふが如き、元もとより嚴密なる審美の学理に因よるものならず。もし問ふものあらば余は唯特別なる事情もとの下に、特別なる一種の芸術を喜ぶと答へんのみ。いはんや泰たいせ西人の浮世絵に關する審美的工芸的研究は既に遠く十年以前全く細微さいびに涉わたりて完了せられたるにおいてをや。

四

余は既に幾いくた度か木にて造り紙にて張りたる日本伝来の家屋に住じゅうしゆんぷうしゆううし春風秋雨四季の氣候に對する郷土的感覺の如何を叙述し

たり。かくの如く脆ぜいじやく弱じやくにして清楚なる家屋とかくの如く湿氣

に満ち變化に富める氣候の中に棲せいそく息すれば、かつて广大堅固な

る西洋の居室に直立濶歩かつぽしたりし時とは、百般の事おのずかしこ自ら嗜好を異

にするはけだし当然の事たるべし。余にしてもしマロツク皮の大お

椅子おいすよこたわに横りて図書室に食後の葉巻を吹かすの富を有せしめば、自おのずか

らピアノと油絵と大理石の彫刻を欲すべし。然れども幸か不幸か、

余は今なほ畳の上に両りようきやく脚あしたを折曲げ乏しき火鉢の炭火によりて

寒かんしのを凌ぎ、簾すだれを動かす朝あしたの風、廂ひさしを打つ夜半の雨を聴く人たり。

清貧と安逸と無ぶりよう聊あしたの生涯を喜び、醉生夢死に満足せんと力つとむる

ものたり。曇りし空の光は軒先さえぎに遮られ、障しょうじ子の紙すかを透してこ

こに特殊の陰影をなす。かかる居室に適應すべき美術は、先づそ

の形かたち小ならざるべからず、その質は軽からざるべからず。然るに

現代の新しき制作作品中、余は不幸にしていまだ西洋の miniature

《ミニニアチュウル》 または銅板画に類すべきものあるを見ず。

浮世絵 木板摺もくはんずりはよくこの欠陥を補ふものにあらずや。都門ともんの劇

場に拙劣なる翻訳劇出づるや、朋党ほうとう相結あいむすんで直ちにこれを以

て新しき芸術の出現と叫び、官宮の美術展覽場に賤いやしき画工ら虚

名の鎬しのぎを削れば、猜疑嫉妬さいぎしつとの俗論轟々ごうごうとして沸くが如き時、秋

の雨しとしとと降りそそぎて、虫の音次第ねに消え行く郊外の佗わびず

住居まいに、倦うみつかれたる昼下り、尋ね来きたる友もなきまま、独

り窃ひそかに浮世絵取とり出して眺むれば、ああ、春章しゆんしょう写楽しゃらく豊国とよくに

は江戸盛時の演劇を眼前に髣髴ほうふつたらしめ、歌麿うたまろ栄之えいしは不夜城

の歡樂に人を誘ひ、いざな北齋ほくさい広重ひろしげは閑雅なる市中しちゆうの風景に遊ばしむ。余はこれに依つて自ら慰むるみずか処なしとせざるなり。

五

近世的大詩人ヴェルハアレンの詩篇に、それが郷きようこく国フラン
ドルの古画に現はれたる生活慾の横おういつ溢を称美したる一章あり。

Art flamand, tu les connus, toi

Et tu les aimes bien, les gouges,

[Au torse e'pais, aux t'etons rouges;]

[Tes plus fie`rs chefs-d'oe&uvres en font foi.]

[Que tu peignes reines, de'esses,]

[Ou nymphes, e'mergeant des flots,]

[Par troupes, en roses i\lots,]

[Ou sire`nes enchanteresses,]

Ou Pomons aux coutours pleins,

Symbolisant les saisons belles,

Grand art des maitres ce sont elles,

Ce sont les gouges que tu peins.

フランドルの美術よ、汝なんじこそはよく彼の淫婦かを知りたれ。よ

くかの乳房赤く肉逞たくましき淫婦を愛したれ。フランドルの美術の傑作はいづれかその証しるしならざる。

その妃きさきを描き女神めがみを描き、或は紅あらくれないの島に群むれなして波間なみまに浮ぶナンフ或は妖艶の人魚の姫。或はまた四季の眺めかたどを形取る肉付のよきポモンの女神。およそフランドル名家の描きし大作は、皆これかの淫蕩なる婦女にあらざるなきを。

この詩章を読みひわいて卑猥ひわいなりとなすものあらば、そはこの詩章の深意を解すること能はざるものなり。ヴェルハアレンはフランドルの美術に現れし裸体の婦女によりて偉大なる人間の活力を想像し賞讃おほ措く能はざりしなり。彼は清浄と禁慾を主としたる従来おほの道德及び宗教の柵さくが外がいに出いで、生活の充実と意志の向上を以て人

生の真意義となせり。永劫えいごうの理想に向つて人生意氣の赴く所、ここに偉大の感情あり。悲壯の美あり、崇高すうこうの觀念あり。汚おじよ辱くも淫慾も皆これ人類活力の一現象ならずして何ぞ。彼の尊ぶ所は深甚なる意氣の旺盛のみ。

Dans la splendeur des paysages,

[Et des palais, lambrisse's d'or,]

[Dans la pourpre et dans le de'cor]

[Somptueux des anciens a^ges,]

[Vos femmes suaient la sante',]

Rouges de sang, blanches de graisse;

Elles menaient les ruts en laisse,

[Avec des airs de royauté.]

絶佳明媚ぜつかめいびの山水さんすい、粉壁ふんぺき朱欄しゆらん燦然さんぜんたる宮闕きゆうけつの中うち、

壯麗なる古代の裝飾に圍繞いにようせられて、フランドル画中の婦

女は皆脂肪あぶらぎりて肌白く血液に満ちて色赤く、おのが身の強

健に堪へざる如く汗かけり。これらの婦女は恣ほしいままにその淫情を

解放して意気揚々いささかの差はずる色だもなし。

これ歐洲新思想の急先鋒たるヴェルハアレンが郷土の美術を詠
じたる最後の一章たり。フランドルはもと自由の国たり。フラマ
ン人は西班牙政庁の羈絆きはんを脱するや最近十九世紀の文明に乗じて
一大飛躍を試みたる国民たり。ヴェルハアレンが Rubens, Van Dy

ck, Teniers 等十七世紀の名画を見その強烈なる色彩に感激したるは毫も怪しむに足らざるなり。しかして余は今自己の何たるかを反省すれば、余はヴェルハアレンの如く白耳義人ベルデツクじんにあらずして日本人なりき。生れながらにしてその運命と境遇とを異にする東洋人なり。恋愛の至情はいふも更なり、異性に対する凡てすべの性的感覺を以て社会的最大の罪惡となされたる法制を戴くものたり。泣く児こと地頭じとうには勝つべからざる事を教へられたる人間たり。物いへば唇寒くちびるきを知る国民たり。ヴェルハアレンを感奮せしめたる生血なまも滴たる羊の美肉びにくと芳醇ほうじゆんの葡萄酒たくままと逞えしき婦女の画も何かはせん。ああ余は浮世絵を愛す。苦界くがい十年親のために身を売りたる遊女えすがたが絵姿はわれを泣かしむ。竹格子たけごうしの窓によりて唯だ茫ぼうぜ

然んと流るる水を眺むる芸者の姿はわれを喜ばしむ。夜蕎麦売よそばうりの
 行あんどう燈淋し氣げに残る川端の夜景はわれを酔はしむ。雨夜あまよの月に啼な
 く時ほととぎす鳥、時雨しぐれに散る秋の木の葉こ、落花の風にかすれ行く鐘の
 音ね、行き暮るる山路やまじの雪、およそ果敢はかなく頼りなく望みなく、こ
 の世は唯だ夢とのみ訳もなく嗟嘆さたんせしむるもの悉ことごとくわれには親したし、
 われには懐なつかし。

六

浮世絵は元より木板画にのみ限られたるにあらず。師宣もろのぶ、政ま
 信さのぶ、懐月堂かいげつどう等の諸家は板画と共に多く肉筆画の制作をなせ

しが、鳥居清信専ら役者絵の板下を描き、宮川長春こ
 れに対して肉筆美人画を専らとせしより、中古の浮世絵はやや確
 然として肉筆派と板下派との二流に分るるの觀ありき。しかして
 明和二年に至り、鈴木春信初めて精巧なる木板彩色摺の法を
 発見せしより浮世絵の傑作品は多く板画に止まり、肉筆の制作は
 湖龍齋、春章、清長、北齋等の或る作品を除くの外、
 多く賞讃するに足るものなきに至りぬ。浮世絵肉筆画の木板摺に
 及ばざる理由は、専らその色彩の調和に存す。木板摺においては
 そが工芸的制作の必然的結果として、ここに特殊の色調を生じ、
 各色の音楽的調和によりて企てずして自から画面に空氣の感情を
 起さしむるといへども、肉筆画にありては、朱、胡粉、墨等の顔

料は皆そのままに独立して生硬なる色彩の乱雑を生ずるのみ。こ
 れ画家の罪にあらずして日本画の物質的材料の欠点たり。今諸家
 の制作を見るに、木板色摺のいまだ進歩せざりし紅絵べにえの時代にお
 いては、板下画家はその色彩の規範を常に肉筆画に仰ぎたれども、
 後のちには全く反対となり、肉筆画の色彩をばかへつて木板画に倣なら
 んとするに至りぬ。ゴンクウルは歌麿が蚊帳美人かちようびじんの掛物かげものにつ
 きて、その蚊帳りよくしよくの緑色おんなおびと女帯こくしよくの黒色との用法の如き
 全く板画のつとに則りしものとなせり。肉筆画の木板画に及ばざる他たの
 理由は布局ふきよくの点なり。木板画は春信以後その描かれたる人物は
 必ず背景を有しここに渾然こんぜんたる一面の絵画をなす、然らざれば
 地色じいろの淡彩によりてよく溫柔なる美妙の感情を誘いざなへり。然るにか

くの如きは全く肉筆画の企て得ざる処とす。試みに今とさかのま土佐狩野るやまとう円山等各派の制作と浮世絵とを比較するに、浮世絵肉筆画は東洋固有の審美的趣味よりしてその筆力及びぼくしよく墨色の気品に関しては決して最高の地位を占むるものにはあらざるべし。唯木板彩色摺において始めて動かしがたき独特の価値を生ず。浮世絵の特色は板画にあり。板画の特色はやさ優しき色調にあり。これがために浮世絵は能く泰西の美術に対抗し得るなり。

七

新しき国民音楽いまだ起らず、新しき国民美術なほ出いでず、唯

だ一時的なる模倣と試作の濫らんしゅつ出しゅつを見るの時代においては、元
 よりわが民族的芸術の前途を予想する事能あたはざるや論なし。余は
 徒いたずらに唯多くの疑問を有するのみ。ピアノは果して日本的固有の感
 情を奏するに適すべきや。油画と大理石とは果して日本特有なる
 造形美を紹介すべき唯ゆいいつ一の道たりや。余は余りに数理的なる西
 洋音楽の根本的性質と、落花落葉虫語鳥声等の単純可憐なる日本
 的自然の音楽とに對して、先づその懸隔の甚だしきに驚かずんば
 あらず。余は日本人の描ける油画にして、日本の婦女と日本の風
 景及び室内を描けるものにしては常に熱心なる注意を怠らず。
 然れども余は不幸にしていまだかつて油画の描きたる日本婦女の
 鬘まげ及び頭とうはつ髪かみに對し、あるひは友ゆうぜん禪ぜん、緋かすり、縞しま、絞しぼり等とうの衣服

の紋もん様ように對して、なんら美妙の感覺に觸れたる事なく、また縁え側がわ、袖垣そでがき、障子しょうじ、箆たんす等すの日本かきよ的よ家居及び什器じゆうきに對して、毫ごうも親密なる特殊の情趣を催したる事なし。余はしばしば同一の画家の制作につきて、その描ける西洋の風景は日本の風景よりも遙に優秀なるが如き感をなせり。一步を進めて妄斷もうだんする事はばかを憚らざれば油畫は金髮の婦女と西洋の風景とを描くに適するものといふべし。余は決して邦人の制作する現代の油畫を嫌ふものにあらず、然れども奈何いかにせん、歌麿と北齋とは今日の油畫よりも遙によく余の感覺に向つて日本の婦女と日本風景の含有する秘密を語るが故に、余はその以上の新しき天才の制作に接するまで、容易に江戸の美術家を忘ること能はずといふのみ。日本都市の外

観と社会の風俗人情は遠からずして全く変ずべし。痛ましくも米
 国化すべし。浅間あさましくも独逸ドイツ化すべし。然れども日本の氣候と天
 象しやうと草木そうもくとは黒潮こくちやうの流れにひたされたる火山質とうしの島
 嶼よの存するかぎり、永遠に初夏晩秋せきやうの夕陽しやうじやうは猩々しやうじやう緋ひの如く赤
 かるべし。永遠に中秋ちゆうしゆう月夜げつやの山水さんすいは藍あいの如く青かるべし。
 椿つばきと紅梅こうばいの花に降る春の雪はまた永遠に友禅ゆぜん模様の染色そめいろの如
 く絢爛けんらんたるべし。婦女の頭髮かみは焼やき鏝こてをもて殊ことさら更に縮ちぢさざる
 限り、永遠に水みづ櫛くしの鬢びんの美しさを誇るに適すべし。然らば浮世
 絵は永遠に日本なる太平洋上の島嶼しまに生るるものの感情かんじに対して
 必ず親密せんとくなる私語さしやきを伝ふる処あるべきなり。浮世絵の生命は実
 に日本の風土と共に永劫なるべし。しかしてその傑出せる制作品

は今や挙げてことごと尽く海外に輸出せられたり。悲しからずや。

大正二年正月稿

青空文庫情報

底本：「荷風隨筆集（下）」〔全2冊〕「岩波文庫、岩波書店

1986（昭和61）年11月17日第1刷発行

1999（平成11）年11月15日第16刷発行

底本の親本：「荷風隨筆 二」岩波書店

1981（昭和56）年12月17日第1刷発行

初出：「中央公論 第二十九年第一號」

1914（大正3）年1月発行

※ルビは新仮名とする底本の扱いにそって、ルビの拗音、促音は小書きしました。

入力：入江幹夫

校正：shiro

2017年11月24日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.w.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

浮世絵の鑑賞

永井荷風

2020年 7月13日 初版

奥付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
<http://tokimi.sylphid.jp/>